

現役から引退生活へ

ウィスコンシン大学日本同窓会

八王子囲碁連盟大和田囲碁同好会 成田 滋

現役の時の話から始める。朝目覚めたときにはもうその日の授業をどう展開するか、その手順を考えるのに頭を痛めた。時に退屈きわまりない会議中ではどんな内職をしようか、と考えを巡らしたものだ。学生や同僚と顔をつきあわせる毎日で、時には煩わしさも感じていた。退職した暁には好きな読書に溺れ、音楽、特にバッハのトッカータや男声合唱曲を聴き、一向に上達しないリコーダの練習に専念するなど、悠々自適の生活をと考えていた。

停年退職することは、今までの日常性から一歩退くだけだと考えていた。平たく云えば凝り固まった暮らしと習慣を変えることだった。だがいざ退職してみるとそういう日課にはならない。朝の寝覚めの床のなかで、まずその日一日をどう過ごしたらいいかを考えなければならなくなった。それまでの自分の生き方、引退という開放感はどこへいったのか、開放感どころでなく世間から隔絶されてしまったような自閉的な感情、空白感がやってくるのである。ついこの間まで身をおいていた住み処が、まるで別世界のように思われてきた。

この異様なほどの空白感に身体が包まれながら、そして昔に戻ることができないとすれば、その空白感は何か別なことで、それも新しい暮らしと習慣で埋めていくしかないと考え着くようになってきた。読書や碁三昧に浸



るのでは、世俗のことが面白くなくなったり、世情に疎くなることにつながるのではないか。この有り体では老いは加速し、この身にのしかかってくるので

はないか、という気分が強くなってきた。

その奇妙な気持の萎縮が自然に消えるようになったきっかけはといえば、自分のこれまで培ってきた専門性や得意分野を発揮できる場を探すことであった。それは、苦学して学位をとった経験を次世代の人々と共有すること、囲碁の奥深さを子どもたちと分かち、この伝統文化を少しでも継承する努力はどうかという衝動であった。

海外での留学経験は貴重なものだった。それは自分の職業を切り拓くことになり、経験を若い人々に伝えることによって、同じような体験をして貰いたいという衝動であった。こうした新しい気分は、かつて毎日の日課を考えるとときのような日常にも似たものとなっていった。高校生や大学生を海外の大学で学ばせる手助けを始めた。東京、名古屋、大阪に出掛け『カレッジ・フェア』という催し物で若者や保護者の留学相談に応じるボランティアである。近年、留学を希望する若者が少なくなってきたことを危惧する機会ともなった。円安も手伝っていた。



それとともに、いつも間にか日常の繰り返しが講じて囲碁連盟の会長に推されることになった。そこで伝統文化囲碁の啓蒙と普及という、少々尊大なことを考えなければならぬ立場になると、これまた新たな日常が甦るようであった。連盟は30年以上の歴史ある組織である。その間に蓄積された資料を保存し、後世に残すことの重要性に気がついた。資料をアーカイブとして電子化する作業が待っていた。

アーカイブを人々のなにかがしのお役にたててもらうには、インターネット上の保管庫に整理しておくことが大事だ考えた。そこでWebサイトを立ち上げた。この作業には友人の手を借りた。サイトをイチから企画・設計し、組み立てていく経験を学んでいくと、基本的な知識や作業をマスターするだけでなく、どうすれば効率よくWebサイトを制作できるかの方略が見えるようになってきた。

Webサイトの構築には、コーディングの基本知識は要求されるが、大枠や基本的な構築ができるツールの操作方法を知っておく必要があった。また画像の加工や文章作成のスキルも大事であるが、こうした作業は、かつて大学の研究室で培ったITの知識とスキルが役立った。Webサイトというのは、全世界中いつでもどこからでも立ち寄ることができる不思議なショーケースである。しかし、人々が立ち停まって品定めをし、役立つように仕向けるには相応の工夫が大事である。

今は、毎日サイトの管理や運営、更新などをやり、いかにユーザーを呼び寄せるかに苦心している。退職や引退という新たな日常性で当初襲ってきた自閉的な感情や空白感から、今は大分遠ざかったように思えるから不思議である。

2023年6月2日